「ナサケハ人ノタメナラズ」考

——延慶本『平家物語』所載歌一首の典拠と変容——

犬井善壽

(一)

延慶本『平家物語』巻五本「六、梶原与佐々木馬所望事」は、寿永三年（元暦元年・一一八四）正月、木曾義仲追討の為に上洛する梶原源太景季と佐々木四郎隆綱が源頼朝から名馬薄墨と生食を下賜される経緯を語る、語り本系の所謂「生食の沙汰」の章にあたる。

延慶本の語り手は、佐々木に下賜された生食の呼称の由来とその名馬ぶりを語った後に続いて、次のように語り、感想を述べる。

此程ノ大事ノ御馬ナリケレドモ、「父ガ墓ニ暇乞ツヽ、十三ノ追善ヲモ引コシ、最後ノ見参ニモ参テ候」ト泣々申タリツル情ヲモ、「神妙也」ト被思食ケル御感ノアマリニ、サシモ秘蔵シタマヒタル生食ヲ給ハリタリケル佐々木四郎ガ心ノ内コソユヽシケレ。何計カウレシト思ケム。

トヘカシナナサケハ人ノタメナラズウキワレトテモコヽロヤハナキ

ト云古歌ノ風情思アハセラレテ哀也。千万ノ軍兵ノ中ニ、父ガ墓所ニテ暇ヲ乞、十三年ノ追善ヲ引コシテ仕ル情ケ、親ノ為トコソ思ケメドモ、天神地祇アハレミ給フユヘニ、鎌倉殿ヨリ生食ヲ給ハリヌル事、情ハゲニ人ノ為ニハアラザリケリ。

（傍線稿者。以下同。）

本稿においては、語り手が「古歌」として引く「トヘカシナ」という歌の典拠とその典拠からの離れを明らかにし、その典拠とする歌の意味するところを吟味し、延慶本『平家物語』作者がこの記事においてその離れを試みた理由とそこに見られる本文形成の態度、ひいては、『平家物語』諸本の形成と変容の方向を検討する。

(二)

まず、語り手が「思アハセ」た「トヘカシナ」という「古歌」の典拠を明らかにする。この歌は、西行詠歌の転用と認めて間違いない。西行の諸家集[2]の中では、『山家集』の「雑下」に、

恋百十首（但シ、一二四一番詞書）

一二八五　とへかしななさけは人の身のためをうき我とても心やはなき

と載る。また、『別本山家集』にも、「恋歌」として載る。即ち、

五九五　とへかしな情は人の身のためをうき我とても心やはなき

『別本』ではこの歌は五七九番から六二七番に至る「寄月恋」の詞書のもとの歌とされているが、実は「寄月恋」の詞書は五七九・八〇番二首のみのもので、五八一番以下の歌は詞書を脱しているのであり、この歌の詞書は不明である。『西行上人集』では、恋部に、

三六二　とへかしななさけは人のみのためをうき我とても心やはなき

と載る。因みに、『西行上人集』の恋部は全歌に詞書が無い。

また、西行家集以外では、宝治二年（一二四八）に成ったと考えられている私撰集『万代集』の初撰本の巻第十三「恋歌五」に、

題しらず（但シ、二六〇一番詞書）　西行法師

二六〇五　うきをうしとおもはざるべきわが身かはなにとてひと

のこひしかるらむ

二六〇六　とへかしななさけはひとの身のためをうきわれとてもこころやはなきも

と、西行の他の詠歌と並べて収められている。また、勅撰集では、文永三年（一二六六）に成った『続古今集』の「恋五」に、

一三三七　だいしらず（但シ、一三三六番詞書）　西行法師
うき世をばあられぬばあるにまかせつつこころよいたくものなおもひそ

一三三八　とへかしななさけは人の身のためをうきわれとてもこころやはなきも

と、こちらも、西行の他の詠歌と並べられて入集している。

西行の三つの家集の記載は、それらが自撰か他撰かという問題と関わってその証拠価値の高低の認定に吟味の必要はあるが、ひとまず、「とへかしな」の歌を西行詠と認定する為の証拠能力を認めてよい。『万代集』と『続古今集』に載る西行詠歌の中には、『山家集』にも載る「何故に今日まで物を思はまし」の歌（『万代集』一九五九番・『続古今集』一〇六九番）が詠者誤伝かと思われる他は[5]、詠者異伝や誤伝はない。この事実と西行の家集に載るという事実とを併せて状況証拠とすると、この「とへかしな」の歌について両集に詠者誤伝があると考える必要はあるまいと思う。

要するに、西行諸家集に載り『万代集』や『続古今集』にも入る「とへかしな」という西行歌は、全て第二・三句が「なさけは人の身の為を」とあり延慶本『平家物語』の第二・三句「ナサケハ人ノタメナラズ」との間にいささか異文があるが、他には異文がなく、ここでは同一歌と認めてよい。延慶本『平家物語』作者は、西行詠の「とへかしな」の歌を、第二・三句を「ナサケハ人ノタメナラズ」と変えて、佐々木が生食を下賜された逸話において語り手に「古歌」として引かせ、「思アハセラレテ哀也」と語らせたのである。

（三）

西行の「とへかしな」の歌は、その具体的な歌題や詞書は明らかではないが、恋歌である。しかも、初句「訪へかしな」から見て、女性を語り手とする男性へ向けての恋歌である。尤も、この歌の解釈については、一部分、研究者の間で少々のゆれがある。風巻景次郎氏は、日本古典文学大系『山家集』[6]の頭注において、

○問へかしな――訪問して下さいと、つれない相手に呼びかけたのである。○情は人の身の為を――情をかけることは相手の人（我）の身のためでもあるものを、の意。○憂き我とても心やはなき――忘れられた不幸な自分にも悲しみは分るのです。

という解を示された。渡辺保氏も、『西行　山家集全注解』[7]において、次のように、風巻氏とほぼ同じ解釈を示される。

訪ねて下さいよ、つれないあなたよ。情をかけることは相手の人（我）の身のためであるものを。あなたにとっていやな私、忘れられた、不幸な私だとて、並々の人の心がないわけでしょうか、あるのです。（かなしみもわかるのです）

しかるに、後藤重郎氏は、新潮古典集成『山家集』[8]頭注に、

自分を訪れて下さい。私を思って下さる情けはあなたの身のためでもありますのに。あなたゆえ辛い思いをしている私とても、あなたのことを案じる心がないでしょうか。ないことはありません。

という解釈を示され、その解釈の後に、次のように付言される。

下句、つらいことには慣れている憂きわが身でもあなたの夜離れを恨む心はあります、とも解せる。

後藤氏が示される、他のお二人とは違った「あなたの身のためでもありますのに」という解や下句の別解の可能性は、一にかかって第二・三句「情けは人の身の為を」の解釈の仕様によると言える。

即ち、第二・三句は「私への情けは（貴方の相手である）人（つまり私）の身の為であるのに」と「私への情けは（私にとっての）人（つまり貴方）の身の為であるのに」との両様の解がされているわけで、これに応じて、下句も、「辛い私とて（貴方を思う）心がないわけではありません」と「辛い私とて（貴方を恨む）心がないわけではありません」との二様の解がされているわけである。

稿者は、この歌の語り手が女性である点を重視し、また、『山家集』の「恋百十首」が後藤氏の言われるように「叶わぬ恋中心」の歌で構成されていることを、その直前直後に配された歌、即ち、

一二八四　待かねてひとりはふせどしきたへの枕ならぶるあらましぞする

一二八六　ことのはのしもがれにしにおもひにき露のなさけもかゝらましとは

が恨恋の歌であること、『西行上人集』で直前直後に配される歌、

三六一　袖の上の人目しられし折まではみさをなりける我心かな

三六三　うらみじとおもふ我さへつらきかなとはで過ぬる心づよさを

も、『山家集』同様に恨恋であること、さらに、『万代集』『続古今集』にこの歌と並べて入集させられている前引の西行歌が全て恨恋と解し得ること、などを考慮し、以下のような解釈をしている。

訪ねて来て下さいな、貴方の恋人である私のところへ。殿方の恋する人に向けての情けというものは、その恋する人の身のためでございますものを。それなのに、貴方は私のところへ情けをかけてくださらないのですね。そんな貴方ゆえに辛い思いをして貴方を恨んでいる私とて、貴方への思いの心はないとお考えなのでしょうか。いえ、そんなことはございません。貴方を思い慕う心でいっぱいなのでございます。

要するに、稿者は、第二・三句「情けは人の身の為を」を、これが恋歌であるゆえに、「（恋の）情けは相手（この場合は「私」）の身の為であるものを」と、一般論として把えて解するのが妥当であると考える。これを「（恋の）情けはめぐりめぐってご自分自身の為でもあるものを」と解釈すると、この歌の場合、語り手が歌う下句の「憂き我とても」の「我」と「も」とが生きて来ず、また、「恨恋」の歌にはならないことになる、こう考えるのである。

実は、この西行詠歌の解釈が、延慶本『平家物語』において「ナサケハ人ノタメナラズ」と改変されて引用されること、恋歌としてではなく引かれることなどと、無関係ではないと考えるのである。

（四）

延慶本『平家物語』に「古歌」として語り手が「思アハセ」て引用した「トヘカシナ」の歌は、その典拠である西行詠歌が恋歌であるにも拘らず、恋歌とされてはいない。これは注意されてよい。

本稿冒頭に引いたように、延慶本では、佐々木四郎が父の墓に暇

乞いに行き十三年追善を行ったが故に遅参したその「情」を頼朝は「神妙也」と感じて生食を佐々木に与えた、とするのであるが、語り手は、その「情」を「親ノ為トコソ思ケメドモ」実はそれだけではないとし、「情ハゲニ人ノ為ニハアラザリケリ」と感想を語る。延慶本では、それには理由があるとするのである。引用に続いて、

コレモ又、佐々木源三秀能ガ、平治合戦之時、六波羅ヘ寄タリケルガ、叶ハズシテ、引ケルニ、左馬頭義朝ヲノバサムトテ、五十余騎ニテ、五条河原四条橋辺マデニ返合〳〵戦ケレドモ、叶ハズ、平家ノ軍兵多ク責来ケレバ、兄弟五騎ニナリテ、義朝ノ引ツル方ヘト志テ、北山ヘ向ケルガ、「我引方ヘゾ敵モオハムズラム。猶義朝ヲノバサム」ト思テ、引カヘシ、粟田口ヘ向ヒケル程ニ、伊藤武者景綱ニ行相テ、一人モノコラズ打レニケリ。其時、鎌倉殿モ、十二才ニテ、父ノ御共ニオハシケレバ、「此等ノ事共ヲ思食忘レ給ハズシテ、今生食ヲ給ハリケルカ」トゾ申ケル。

と平治の合戦の際の一件を回想する。佐々木源三秀能とは隆綱の父である。秀能は頼朝の父義朝の為に討死にした。その秀能の忠義を頼朝は忘れてはいない。秀能の子の隆綱が父の墓に詣り追善をした為に頼朝の許へ着くのが遅れたが、その「情ケ」を「神妙也」として頼朝は隆綱に生食を与えた、こういうわけなのである。まさに、語り手の言うとおり「情ハゲニ人ノ為ニハアラザリケリ」である。

このように延慶本の記事を辿ると、「トヘカシナ」の歌は、典拠の意味とは異なった考えを示す目的で引かれていることがわかる。

先ず「トヘカシナ」は、「（私の所へ）訪へかしな」ではなく「（昔の事を）問へかしな」である。昔の一件を思い合せて下さい、享受者よ、である。「ナサケハ人ノタメナラズ」は、延慶本の本文では、「親ノ為トコソ思ケメドモ」と「人」を親としているが、当然、「秀能が義朝に尽した『情け』つまり忠義は、相手つまり義朝の為だけではないことになった。めぐりめぐって、その秀能の子である隆綱が義朝の子の頼朝から生食を下賜されるという報いとなってあらわれた」という意味を内包することになる。下句「ウキワレトテモコヽロヤハナキ」も、こう見ると、ごく自然に解釈できる。即ち、「遅参するという、思いのままにならず辛い思いをした私として、頼朝様のことを思う心がないはずがないではございません」の意味に「思アハセ」て語り手は語るのである。つまり、延慶本の語り手は、この歌の語り手を隆綱の立場に置き換えて西行歌を引き、それを「古歌ノ風情」と見なしているということになるのである。

なお、冒頭に引いた延慶本の記述は、その直前に語られている、

佐々木四郎隆綱、鎌倉殿ニ参タリ。「イカニ今マデ遅カリツルゾ」ト宣ヘバ、「老少不定ノ堺ニテ候シ上、合戦ノ道ニ向キ候事、再ビ故郷ニ帰ルベシトモ存ゼズ候アヒダ、父ニテ候シ者ノ墓所ニ暇乞候ツル次ニ、十三年ノ追善ヲ引コシテ仕リ候ツル間、遅参仕テ候。ヤガテアレヨリコソ打出ベク候ツレドモ、親ノ幸養ヲ引コシ候程ニ、無常ヲ観ジ候ナガラ、争カ今一度ミモマヒラセミヘモマヒラセ候ハデハ候ベキト存候テ、参テ候」トテ、フシメニゾナリタリケル。

という佐々木の遅参の申し開きの件と、佐々木に生食を与えたいとは思うものの先に梶原が望んだにも拘らず惜しくて薄墨の方を与えた手前「イカヾスベキ」と困惑する頼朝の言葉に対する佐々木の、

梶原ガ千万ノ恨ハサモ候ハヾ候へ。一疋ノ生食ヲ給テコソ、生

前ノ名誉ヲ末代ニ伝ヘ、後生ノ面目ヲ閻王ノ庁庭ニホドコシ候ハムズレ。其上、臥士トナリ候テ、梶原ガ恨ヲナドカ一往陳ジ開カデハ候ベキ。一切クルシカルマジク候。

という答えとの、二つの記述に対応していることは、言うまでもない。これら前後の記事の全てが、語り手が「思アハセラレ」て「古歌」として引く歌の中の第二・三句「ナサケハ人ノタメナラズ」という語句に示された考え方に収束していると言ってよい。延慶本作者は、巧みに工夫して「トヘカシナ」の歌を引いているのである。

（五）

『平家物語』諸本を見ると、この延慶本のように、佐々木が父の追善の為に遅参したという理由の陳述や、遅参の理由に感じて頼朝が生食を与えたとする本は多くない。他本の記事は、長門本は、

その後佐々木四郎高綱、上洛のいとま申しに参りたりければ、兵衛佐いかゞおもはれけん、この馬に乗りて宇治川の先かけて高名せよとて、かの秘蔵の池月をたびてけり。面目いふばかりなし。（巻十六）

とするのみである。『源平盛衰記』も、頼朝の「如何、御辺は此間は近江に在国と聞ば、志あらば軍兵上洛に付て、京へぞ上給はんずらんと相存るに、いつ下向ぞ」という問いに、佐々木高綱が、

今一度見参にも入、御暇をも申さん為、又、いづくの討手に向へ共、慥の仰をも蒙らん料に、正月五日の卯刻に、佐々木の館を打出て、三箇日の程に、鎌倉に下著し侍り。且は下向せずして、自由の京上も其恐ありと存、旁の所存によりて罷下れり。志は加様にはこび奉りたれ共、一匹持侍りつる馬は馳損じぬ。親き者と云、知音と申、人々面々に打立間、誰馬一匹をも尋乞べしとも覚ねば、如何仕侍るべきと心労して、大名小名既に上りぬれ共、今までは角て候也（巻第三十四・佐々木賜生食）

と答えたとするだけである。『源平闘諍録』も、ごく簡潔に、

又、佐々木四郎高綱、参御前申、今度宇治橋定被引候覧、無馬候、為何不覚可仕先懸候、賜生食、係真先候申、（第八上）

とするのみである。四部合戦状本は、他本と異なり、宇治川先陣争いを語った後に、名馬生済を佐々木が下賜された件を語る。即ち、

其故、高綱遅参、佐殿、何遅被仰、仕親葬送候、依重君仰、荼毘未見了、参候、双眼涙浮、鎌倉殿、有御感、賜此馬、（九）

高綱が親の葬送の為に遅参したとする点は延慶本と似るところがあるが、延慶本のようには秀能と義朝の平治の一件を持ち出すわけでもなく、「とへかしな」の歌を引き合いに出すわけでもない。

しかるに、鎌倉本の記述は、歌は無いが延慶本と一部合致する。

佐々木四郎高綱ガ暇申ニ参タリケルニ、「所望ノ者多少モ有ドモ、和殿ガ父秀義ハ、故左馬頭殿ニ奉属テ、保元平治両度ノ合戦ニ致忠。中ニモ平治ノ合戦ノ時、六条河原ニテ不惜命役キ。其奉公ヲ思バ、和殿及モ不思疎。存知セヨ。是ニ乗テ宇治川ノ真前仕レ」ト、活食ヲ佐々木四郎ニゾ給リケル。此馬ヲ給テ、御前ヲ罷立トテ、余ノ嬉サニ、打泪グムデ申ケルハ、「身為恩使、命ハ依義軽ト申事ノ候。高綱、此馬ニテ宇治河ノ真先渉シ候ベシ。『宇治河デ死ムデ候』ト聞召レ候バ、『人ニ先ヲ被為テケリ』ト思食候ヘ。『未活テ候』ト聞召候バ、『定テ先陣ヲバ為ツラム者ヲ』ト思食レ候ヘ」ト申切テ、御前ヲ立ツ。参会シタル大名小名、是ヲ聞テ皆、「広量ノ申様哉」ト私語逢リ。

これは、百二十句本・平松家本もほぼ同じ本文なのである。「身為恩使、命ハ依義軽」は、新潮古典集成の頭注に指摘があるように、『後漢書』の引用である。これを引くことは、延慶本作者が「トヘカシナ」の歌を引くことと一脈通ずるところがある、と見てよい。

覚一本をはじめとするいわゆる語り本系諸本の記事を、覚一本の本文を以って代表させて示すと、梶原が摺墨を賜った件に続いて、

佐々木四郎高綱がいとま申しにまいッたりけるに、鎌倉殿、いかゞおぼしめされけん、「所望の物はいくらもあれども、存知せよ」とて、いけずきを佐々木にたぶ。佐々木、畏て申けるは、「高綱、この御馬で、宇治河のまッさきわたし候べし。『宇治河で死て候』ときこしめしあはば、『人にさきをせられてンげり』とおほしめし候へ。『いまだいきて候』ときこしめされ候はば、『定て先陣をばしつらん物を』とおほしめされ候へ」とて、御まへをまかりたつ。参会したる大名小名、みな「荒涼の申様かな」とさゝやきあへり。（巻第九「宇治川の事」）

とある。葉子十行本・流布本等もほぼ同文である。後半部分は鎌倉本等の本文とほぼ合致している。鎌倉本等の佐々木の父の秀能の平治における奉公を語る箇所が覚一本等において削除されたのか、鎌倉本等がその記事を増補したのか、今のところ判然とはしないが。

佐々木が生食を下賜された理由に、父秀能の追善をした件を挙げるのが延慶本、親の葬送を挙げるのが四部合戦状本、秀能の平治の合戦時の奉公を挙げるのが延慶本・鎌倉本・百二十句本・平松家本等といった具合で、延慶本と部分的に似るところのある本があるに過ぎない。全く同じ構成の伝本はないのである。『後漢書』の文句を引く鎌倉本等に延慶本と軌を一にする構成意識が認められるものの、「古歌」として西行の「とへかしな」の歌を歌形を変えて引くのは延慶本のみである。とすると、これは、『平家物語』本文流伝史の流れの中で延慶本作者のみが構えた一つの虚構と見る他ない。

（六）

「情けは人の為ならず」という成語がいつごろ成ったのか、稿者には調査の準備がないが、西行が「情けは人の身の為を」と詠んだのはこの成語を言い変えたのであろうから、平安時代末期には成っていたと判断できる。西行はそれを恋歌に詠み込んだ。延慶本『平家物語』の作者は、その西行詠歌を、普通用いるのと同じ意味と言い回しに戻し、佐々木が生食を下賜される記事において、語り手に「思アハサレ」たとして引用した。それも、佐々木が「応々申タリツル情」に頼朝が感心したとし、「十三年ノ追善ヲ引コシテ仕ル情ケ」を天神地祇が哀れんだとした上で、「情ハゲニ人ノ為ニハアラザリケリ」と、この歌の意味を繰り返すことになるまでの感想を付して。この構想が、数多い『平家物語』改作者たちの中でも、延慶本作者のみが構えたものである、という事実は注目される。

延慶本『平家物語』作者は、知られるように、崇徳院説話つまり第一末「卅七　西行讃岐院墓所ニ詣ル事」において、西行を、作中場面に名前を隠すことなく登場させている。にも拘らず、この「梶原与佐々木馬所望事」の記事においては、「トヘカシナ」の歌をことさらに「古歌」とし、西行の名前を隠している。それは、恋の歌を恋とは全く異なった事件の感想を示す為に引いたこと、その歌語を大きく改めたこと、その意味するところを大きく変えたこと、これらが与っていると見てよかろう。延慶本の作者は「情けは人の為

ならず」という成語を、この名馬下賜争いにおいて佐々木が勝利を得たという逸話の主題として用いたかったに違いない。ただ、その成語を成語のまま引くだけでは能がないと判断し、既に西行が意味を変えて歌の中に用いたこの成語を、詠者名を伏せ、「古歌」と呼んで、この記事における自分の目的の通りの語句に戻して引いたのである。西行詠と明示してこの「トヘカシナ」の歌を引く程までの乱暴さは延慶本の作者にはなかった、と稿者は考えるのである。

歴史事実を素材としつつ歴史事実のままではない題材に作り変えることによって、『平家物語』を創り上げていった延慶本作者であるが、勝手気儘に典拠や事実を曲げたわけではない。この「トヘカシナ」の歌を主題も語句・表現も変えたが為に詠者西行の名を伏せた態度でも明らかなように、それなりの節度を保って『平家物語』を創っていたのである。「情けは人の身の為を」と「ナサケハ人ノタメナラズ」との差異は、小さな差異ではないのである。

『平家物語』の他の伝本・異種本がこの歌をこの「生食の沙汰」に当たる記事において引かない理由は、判然としない。他本の改作者が、西行歌の言い替えであることを見抜いて敢えてこの和歌を以ってする感想を削ったのか、西行詠歌とは知らずに削ったのか、逆に、延慶本作者の方が他本のごとき本文に佐々木の遅参の理由を語る記事を加筆したのか、鎌倉本等のごとき構成に延慶本が加筆したのか、皆目見当がつかない。ただ、いわゆる語り本系の諸本には西行は登場せず、また西行の歌が引かれることがないにも拘らず、いわゆる読み本系の諸本の中には西行が登場し、あるいは西行の歌が引かれる伝本がある。四部合戦状本の巻九にも、宗盛の詠として、

外ニ思フ歎キナラネバ誰ニカハ自身外ニハ可問覧

と、西行の詠歌が、西行の名を伏せて、歌語を一部変えて、用いられる例がある。かような似た事例は、留意しておいてよいと思う。

「生食の沙汰」は、延慶本のごとき構想が源流になって他の諸本のごとき本文へ変容して行ったと考える。「情けは人の為ならず」の成語を主題として語られる佐々木の名馬下賜争い勝利談から、宇治川先陣争いの前置きの話へと、質が変えられて行ったのである。

（1）『平家物語』諸本は、以下の文献に拠り、濁点・句読点等を付して引く。延慶本（汲古書院影印）・長門本（岡山大学本）・源平盛衰記（国民文庫）・源平闘諍録（和泉書院影印）・四部合戦状本（斯道文庫編校影印）・鎌倉本（古典研究会叢書）・百二十句本（新潮古典集成）・覚一本（日本古典文学大系）

（2）西行の家集は、久保田淳氏編『西行全集』に拠る。「別本山家集」は日本古典文学影印叢刊『平安私家集』所収に拠る。なお、管見に入った諸家集の諸伝本の本文をも参照した。

（3）『万代集』は、『新編国歌大観』所収に拠る。

（4）『続古今集』は、『新編国歌大観』所収に拠る。

（5）拙稿「『山家集』所載西行歌一首存疑」（「文芸言語研究」六・七、昭和五六年12月・五七年12月）において検討した。

（6）『山家集金槐和歌集』（昭和三六年4月）。頭注は、風巻氏の逝去の為、小島吉雄氏らが風巻説を整理・加筆されたもの。

（7）『西行　山家集全注解』（昭和四六年1月）。

（8）新潮日本古典集成『山家集』（昭和五七年4月）。

（9）「素材・題材」の語は小西甚一氏「分析批評のあらまし」（「解釈と鑑賞」昭和四二年5月）に従う。